# 昭和初期の満州イメージ
## －雑誌『旅行満洲』を通じて－

森 大紀

はじめに
第一章　『旅行満洲』の概要と当時の旅行事情
　第一節　『旅行満洲』の概要と特徴
　第二節　『旅行満洲』の発刊目的と読者層
　第三節　日本の旅行事情－外客誘致の観点から－
第二章　『旅行満洲』にみる満州旅行
　第一節　満州旅行の全容
　（一）　満州旅行の起源
　（二）　一般旅程と費用概算
　（三）　宿泊施設とその特徴
　（四）　各都市の主要観光スポットと土産物
　（五）　旅行における注意事項 - 税関に関して－
　（六）　『旅行満洲』にみる日中戦争勃発の影響
　第二節　満州旅行分析と広報による満州イメージ変化
第三章　『旅行満洲』にみる満州主要都市イメージ
　第一節　大連
　第二節　ハルビン
おわりに

## はじめに

日本人にとって初めての海外旅行先は一体どこであったのか。それは隣国満州であったと言われている。日露戦争直後の明治末期から、満州をはじめ朝鮮や中国など、当時流行語にもなった「東亜旅行圏」への旅行がはじまった[1]。満州への旅行は、満州国建国と同時に増加の一途を辿り、結果として日本が大陸進出への足掛かりとなった満州国を国内にアピールし、満州の認識向上とイメージ変革の手段にもなった。そして昭和初期の国民が、新聞以外で唯一満州の実情を知ることができた雑誌こそ、本稿が扱う雑誌『旅行満洲』である。旅行先としての満州の研究は、関西大学の荒山正彦氏が植民地ツーリズムなどという名で研究されている。代表的なものとしては、『忘れられた植民地ツーリズムの軌跡』[2]や『外地植民地ツーリズムの空間』[3]などが挙げられる。しかしながら、この雑誌『旅行満洲』を通じての満州研究は全くないといっても過言ではない。『旅行満洲』の原本があまり残っておらず、各大学にいくつか数巻にわたって保管されているのみであるのが理由であった。しかし 2016 年 12 月

[1] 小島英俊『文豪たちの大陸横断鉄道』（新潮社、平成 20 年）、4 頁。
[2] 荒山正彦『忘れられた植民地ツーリズムの軌跡』（時計台、平成 23 年）
[3] 荒山正彦『外地植民地ツーリズムの空間』（歴史地理学会、平成 27 年）

不二出版から復刻版『旅行満洲』という形で、ほぼ全巻が徐々に発刊されていくことが決まり、本論文はその復刻版『旅行満洲』を軸にしている。

『旅行満洲』の概要については次章で後述するが、本論文は上述の既存研究を踏まえ、『旅行満洲』を通じて昭和戦前期の満州旅行の実態と満州へのイメージを追っていく。なお本論文は、分析対象を全 11 巻の中から、第 1 巻第 1 号（昭和 9 年 6 月）～第 4 巻第 9 号（昭和 12 年 9 月）までに限定している。未だ多くの巻が復刻途中で、発売されていない部分が多いというのが理由であるが、満州事変直後から日中戦争開始直後までを研究対象とすることで、満州旅行が隆興していく流れを追うことができるとともに、日中戦争が開戦する前後において、隣国である満州へ旅行すること自体への変化や影響について分析できるためである。

本論文の構成は、第一章においては、『旅行満洲』の概要と内容の特徴、発刊目的や読者層を述べると同時に、日本の旅行事情を外客誘致という観点から整理していく。そして第二章においては、『旅行満洲』から読み取れた昭和初期の満州旅行について、主要な観光地や観光ルート、費用概算やお土産、宿泊施設などに言及しながらその実情を紹介したのち、『旅行満洲』を通じた旅行先としての満州に対するイメージの変化を治安面や広報面も含めた視点から分析していく。第三章においては、満州における都市イメージ分析ということで、大連とハルビンを取り上げ、旅行の目的地として訪れる際に抱くイメージを各都市の描写を中心に分析していく。なお本論文内では『旅行満洲』と引用部分以外の満州の「州」はすべてこの「州」で統一した。なお巻末に鉄道路線を中心とした満州国全図（図 1）を掲載したので、地名や路線名はそれを参照してもらいたい。

## 第一章『旅行満洲』の概要と当時の旅行事情

本章においては、『旅行満洲』の概要や特徴とともに、発刊目的や読者として考えられていたターゲットについて論及する。また日本の旅行事情について、外客誘致の観点から整理していく。

### 第一節『旅行満洲』の概要と特徴

本節においては雑誌『旅行満洲』の概要と特徴について紹介する。

雑誌『旅行満洲』は、昭和9年6月にジャパン・ツーリスト・ビューロー大連支部から発行された。第5巻第4号より『観光東亜』に、第10巻第7号からは『旅行雑誌』と改題され、昭和19年8月の第11巻第8号まで約11年にわたって刊行された。記事の内容は極めて多様であり、毎号特集が組まれ、巻頭には10頁ほどそれに関するグラビアが掲載されている。しかしそれ以外は、観光地案内を中心に、宿泊施設や旅程紹介などの観光情報はもちろんのこと、お土産屋や名産品、海運会社などの広告（図2&3）、時刻表（図4）、スキーや狩猟、釣り、温泉などのレジャー情報なども豊富に掲載されている。そのほかにも漫画や文芸作品、芸術、歴史に関する記事も多く掲載されており、総合文化雑誌としての側面もあった。また時代を下るにつれ、巻末にニュースやツーリストレポルタージュという名で、満州を中心に旅行に関連する新着ニュースを掲載するコーナーを設けたり（図5）、第4巻第6号（昭和12年6月）からは旅行相談、第4巻第7号（昭和12年7月）からは読者だよりという読者からの問い合わせに対応していくコーナーも新設されている。当然発刊当初より各号当たりの頁数は増え、当初平均60頁ほどであったが、3年後には平均100頁を超えるようまでになっている。これは記事の大半を寄

稿者からの投稿に依っていることが理由であり[4]、この雑誌の特徴の一つであるとともに、記事の充実はすなわち読者の増加、発行部数の増加に繋がっていた。発行部数については、先述した通り先行研究がないこともあり、正確なデータは得られなかったが、第3巻第5号（昭和11年6月）の段階で、編集部内に寄稿記事が山積みになっており、一万部印刷の目標が見えてきたと記述されている点[5]や、第4巻第4号（昭和12年4月）において発行部数2万部を超えたと記述されている点[6]からも、急速に人気を博していたことが読み取れる。昭和14年段階で年間発行総数8万部ほどになっていたとされる[7]。『旅行満洲』がどのように国内外に流通していったかは推測の域を出ないが、その多くは満州国内で流通していたのではないかと考えられる。そのため、ソ連の対日参戦によって、満州から逃避し帰国する際に、中国の匪賊に国籍を隠すためなど諸理由があり持って帰らなかった。大半が中国で消失したため、現代日本において原本がほとんど残っていないことにも繋がるのではないかと考えられる。

## 第二節『旅行満洲』の発刊目的と読者層

既述のような特徴を持つ『旅行満洲』であるが、本節では発刊目的、そして読者層について分析していく。

まず発刊目的であるが、『旅行満洲』内には、視察での来満者が増えている背景から、内地の人々により満州への旅行に興味を持ってもらい、満州を印象付けるためであるとともに、満州の人々に対しては、灯台下暗しであろう満州の都市や温泉、景勝地を訪ねてほしいとの思惑からであると書かれている[8]。それと同時に、満州に訪れる人々の満州に対する認識の低さ是正も発刊の重要な背景であった。当時の大連埠頭事務所において視察者や学生からされた滑稽な質問として「関東州は満洲国なりや支那なりや」「満州は一望千里と聞いていたが山がないではないか」[9]などが数多くあったことからもそれはうかがえる。これらの背景から、『旅行満洲』は現地の人々にとっても待望の雑誌であったと考えられる。満州旅行の起源については次章で触れるが、その一番の目的は、満州事変をきっかけにして、満州は世界から注目を集めているので、同地に対する理解や実情認識を高めるとともに、日満共同して満州を繁盛させることにあったといえる。

そして読者層は、既述した発刊目的にもあったように、内地の人々と満州国内の人々両方がターゲットであったと思われる。復刻版『旅行満洲』の推薦文の中で、西原氏は「日本人観光客だけのために作られた雑誌」と記している[10]。確かに主要都市の観光情報や土産物・宿舎施設の情報は日本から満州への旅行を考えている人々に向けてのもので間違いないであろう。しかしながら、既述したように『旅行満洲』は総合文化雑誌の側面をも持っており、季節によってスキー場[11]やハイキングのコース案内[12]が載せられたり、釣り場[13]や狩猟の案内[14]、哈爾浜の競馬[15]の紹介記事などが多く掲載されて

4 『旅行満洲』第 1 巻第 1 号（ジャパンツーリストビューロー大連支部、昭和 9 年）、43 頁。
5 『旅行満洲』第 3 巻第 5 号（昭和 11 年）、71 頁。
6 『旅行満洲』第 4 巻第 4 号（昭和 12 年）、176 頁。
7 復刻版『旅行満洲』カタログ（不二出版、平成 28 年）、2 頁。
8 前掲、『旅行満洲』第 1 巻第 1 号、43 頁。
9 前掲、『旅行満洲』第 1 巻第 1 号、24 頁。
10 西原和海、「『昭和』と『康徳』のツーリズム」、（前掲、復刻版『旅行満洲』、3 頁）。
11『旅行満洲』第 3 巻第 11 号（昭和 12 年）、44 頁。
12『旅行満洲』第 3 巻第 8 号（昭和 12 年）、58 頁。
13『旅行満洲』第 3 巻第 4 号（昭和 12 年）、64 頁。
14『旅行満洲』第 3 巻第 9 号（昭和 12 年）、41 頁。

いる点などは、典型的な満州在住日本人向けの記事であるともいえる。

## 第三節　日本の旅行事情－外客誘致の観点から－

次章から本論文の中心である昭和初期の満州旅行の実情分析に入っていくのだが、その前に本節で当時の日本の旅行事情を整理しておきたい。イギリスにおけるトーマス・クック・アンド・サン社の設立を起点として、チャーター列車のツアーなど世界各国で海外旅行に出掛ける人が急増した。それにより在留外国人は年々増加し、東海道本線の開通などインフラ整備も整う中、政府による組織的な観光誘致への取り組みが求められていった。その中の明治45年、半官半民団体であるジャパンツーリストビューローが設立された。国内外に支部や案内所が設置され、外客誘致や海外宣伝のみならず、邦人の国内外旅行斡旋にも積極的に取り組むこととなった。その一方で、元九州鉄道経理局長であり、経済界でもその名を馳せていた志立鐵次郎[16]は、外客が多ければ多いほど自国の弱点を世界に晒すこととなり、国の品位を傷つけることになり、それが外客誘致の最大の問題であると懸念を述べている[17]。つまり旅行客にとって、唯一の安らぎはホテルなど宿泊施設であり、それらの設備の貧弱さなどが原因で、日本のイメージが低下することを懸念していたのである。実際のところ当時日本を旅したロックウッド氏は『米国雑誌記者の日本観』において、日本のホテルは欧風化にこだわろうとするが、旅行客からすれば日本風を味わいたいわけであり、日本風の本質を減却するのは間違っていると述べるなど、日本のサービスと施設の未熟さを指摘している[18]。これら外客誘致の動向や日本が直面した問題点は、後に満州国における外客誘致にも多大なる影響を与えたと思われる。そしてその外客誘致の一手段として、本論が扱う『旅行満洲』発刊も、その一端といえるであろう。志立は「ジャパンツーリストビューロー等にて有力なる雑誌を刊行し世論を指導啓発するの勝れるを信ず」とも述べており、国民にその土地の魅力を伝え、旅行者の誘致に繋げていく方法として広報雑誌の発刊を挙げていたのがその証在である[19]。『旅行満洲』はまさに満州を国内外にPRする一大広報誌であった。同誌内には、後述するように満洲の観光誘致策の問題点などを日本の観光地や国民性とともに論じる記事など、日本と比較している記事も少なからず存在していた[20]。日本国内の旅行事情としては、鉄道網の普及なども相成って、国内各地への鉄道旅行や温泉旅行などが活発化していくとともに、本論が扱っている日本人初の海外旅行となった満州旅行などを楽しむ国民も増えていった。しかし、日中戦争が勃発すると国際観光局が1942年に廃止されるなど、海外旅行に関しては次第に制限されるようになっていった[21]。また政府は、戦勝祈願という名目で寺社への参拝旅行を推奨していった。代表的なものとしては、児童の修学旅行先が日本の著名観光地から伊勢神宮をはじめ、橿原や宮崎などに変化していったものが象徴的である[22]。このように、国内においては東亜交通公社（旧日本旅行協会）[23]を中心に宣伝

---

15『旅行満洲』第 3 巻第 4 号（昭和 12 年）、38 頁。
16 九州鉄道経理局長や住友銀行本店支配人など経済界の要職を歴任。また「朝日新聞」経済部長としても活躍し、当時は日本興業銀行の第 2 代総裁。昭和 2 年には日本代表としてジュネーブで開催された国際経済会議に出席した。（『講談社日本人名大辞典』、講談社、平成 13 年）
17 牧村理浩「近代日本の外客誘致政策」（慶應義塾大学玉井清研究会、平成 28 年）、192 頁。
18 前掲、「近代日本の外客誘致政策」、196 頁。
19 同上。
20『旅行満洲』第 4 巻第 9 号（昭和 12 年）、48 頁。
21 前掲、「近代日本の外客誘致政策」、194 頁。
22 太田孝『昭和戦前期の伊勢参宮修学旅行と旅行文化の形成』（古今書院、平成 27 年）
23 昭和 17 年（1942 年）12 月、日本旅行協会を引き継ぎ、国際観光協会を統合してできたものであり、旅

対象を変えつつも、旅行斡旋の取り組みは続けていたことがわかる。次章からは満州旅行の実情に迫っていく。

## 第二章『旅行満洲』にみる満州旅行

### 第一節 満州旅行の全容

本節ではまず『旅行満洲』から読み取れる満州旅行の実態について、起源や一般的な旅程や費用、主な観光地や土産物、宿泊施設、注意すべきことなどについて各項に分けて論及する。

#### （一）満州旅行の起源

満州旅行の起源は、日露戦争まで遡る。日露戦争に勝利した日本は明治38年（1905年）のポーツマス条約によって関東州の租借権とロシアが所有していた東清鉄道（大連－長春）を手に入れた。これに伴い、明治39年（1906年）には南満州鉄道株式会社（満鉄）が設立され、本格的な統治が始まると同時に、政府は満州への旅行を推奨しはじめた。これが満州旅行の起源である。当時の東京朝日新聞が企画した「日清・日露戦跡・見学団体旅行」は、満州旅行を企画した初めてのツアーであり、次のような布告文を新聞に掲載していた。[24]

「夫れ満韓の港湾山野は我忠勇なる海陸将士の血戦力闘して以て帝国の武威を発揚したる所、思うに親しく之に就いて戦跡を弔し忠魂を慰し、併せて我が皇威の那辺に及べるかを視察せんとは、苟も日本の何たるかを解せる内外人の等しく渇望する所なるべし…」（『東京朝日新聞』,明治39年6月22日）

初期の満州旅行は、政府と軍部による満州旅行を日清日露戦跡の巡礼旅と称する大々的な奨励策が存在し、富国強兵的な国家戦略が背景にあったとされている[25]。かつての日本人は文明的に他国より劣っており日本人であることを卑下していたが、当時は日清日露戦争の勝利を通じて一躍欧米列強の仲間入りを果たした日本の一国民として、海外を旅行することで改めて海外の事情を知るとともに、日本を客観視する必要があるとして推奨していたのである[26]。代表的なのが、満鉄の招待によって満州を旅し、その旅行記『満韓ところどころ』が東京朝日新聞に連載された夏目漱石である[27]。満鉄が彼を招待した背景としては、当時の満鉄総裁中村是公が、漱石と下宿先の同期だったこともあるが、彼のような影響力のある当時の著名人に旅行記を書かせることで、より多くの人々に満鉄という会社をはじめ、満州というエリア自体を多くの人に知ってほしいと考えていたからである。その旅行記の一文としては

「五時の汽車で八時頃奉天着。支那人の食堂にて夕食。露西亜人多し。博賭をやっている奴あり。寝台車に入る。…（中略）…向う側に露西亜の列車が待っている。又部屋があるとかないとかで大混雑なり。長春の駅長が部屋を取って置いてくれる。…」[28]

など、旅程はもちろん、誰と会ったなどの記述も豊富であった。

---

行斡旋業務と観光宣伝を戦争末期まで行っていた。

[24] 前掲、『文豪たちの大陸横断鉄道』、17 頁。

[25] 前掲、『文豪たちの大陸横断鉄道』、4 頁。

[26] 森正人『昭和旅行誌―雑誌『旅』を読む』（中央公論社、平成 22 年）

[27] 前掲、『文豪たちの大陸横断鉄道』、22 頁。

[28] 前掲、『文豪たちの大陸横断鉄道』、33 頁。

（二）一般旅程と費用概算[29]

次に昭和初期の満州旅行の一般的な旅程を紹介する。入満する方法として代表的なものが三パターン存在した。

① 兵庫の神戸から大阪商船を利用し、3日かけ大連港に入る
② 下関から関釜連絡船に乗り釜山へ。そこから京城・平壌を経由し、安東から満州へ入り、奉天に至る。
③ 敦賀から北日本汽船に乗り、清津or羅津or雄基で降りる。そこから京図線で吉林・新京へ至る。

旅行者は以上のようなルートを組み合わせ、満州と日本を行き来していたのである。次に具体的に3ルート示し、費用概算（総費用）を出してみる（全て東京発着）

① ②のルートで入満し、奉天から撫順を往復し、哈爾浜へ。その後新京に立ち寄った後に南下し、大連・旅順を観光し、①のルートで帰国した場合（15日間）
2等：208圓00銭・3等：137圓58銭（20人以上の団体旅行の場合）
2等：258圓46銭・3等：163圓14圓（個人旅行の場合）
② ③のルートで入満し、吉林から哈爾浜へ。新京に寄りつつ南下し、大連・旅順へ。再び北上し奉天・撫順を観光。その後②のルートで帰国（17日間）
2等：225圓77銭・3等155圓77銭（20人以上の団体旅行の場合）
2等：281圓66銭・3等181圓13銭（個人旅行の場合）
③ ②のルートで入満し、京城から京元線・威鏡線を経由し、清津・羅津・雄基を観光したのち、吉林・新京へ。その後哈爾浜に向かい、観光後は一気に南下し奉天・撫順へ。再び南下し大連・旅順へ。最後は①で帰国（16日間）
2等：227圓05銭・3等：156圓36銭（20人以上の団体旅行の場合）
2等：290圓31銭・3等：179圓59銭（個人旅行の場合）

以上の旅程と費用概算はあくまで参照程度であるが、当時の満州旅行を想起するには十分なものである。これらの金額に関しての考察は後述する。

（三）宿泊施設とその特徴

次に満州旅行の興隆に伴い、各地で整備されてきた宿泊施設事情につて紹介する。旅行の中でも重要な宿泊施設の整備が満州各地で進んだのは昭和10年（1935年）以降である。というのも、昭和9年（1934年）7・8月に満州国内で列車事故が多発し、これによって視察者の増加率は後掲の表1に示すように一時的に低迷した[30]。しかし結果としては、このことが改めて満州への外客誘致に向けて満州全土で本腰を入れ始めるきっかけになったのである。当時の観光整備に対する意見としても、鉄道網の発達に伴い満州旅行は徐々に楽になってきているが、問題なのは過渡期に甘えていた旅館など各宿泊施設の整備であるとの指摘が存在していた[31]。他にも、海外の多くの視察団が朝鮮から入満し、奉天のみを通り、首都の新京には見向きもしない状態であることを取り上げ、満州国の認識が未だ海外

[29]『旅行満洲』第 4 巻第 4 号（昭和 12 年）、88 頁。
[30]『旅行満洲』第 2 巻第 3 号（昭和 10 年）、74 頁。
[31]『旅行満洲』第 2 巻第 4 号（昭和 10 年）、86 頁。

には浸透していないことに論及するとともに、日本の観光政策と比較し、訪れるすべての人にもっと満州を気に入ってもらえるように、サービス一つ一つに対しても気を遣い、各都市が誘致に対しての意識の向上を図るべきだと言及するものもあった[32]。以上のことから、昭和6年（1931年）の満州事変後は予想以上に観光客や視察者が一気に押し寄せ、各地の観光整備もままならぬまま、いわば成り行きに任せていても人が来てくれている状態であったことが読み取れる。また同時に、列車事故がきっかけになって、改めて入満旅行者対策が各地で本格化し、満州旅行の興隆を後押する結果になった時期であるともいえよう。

結果的に、日中戦争勃発の年である昭和12年（1937年）ともなると鉄道総局直営ホテルをはじめとし、和式&洋式のホテルや旅館が多く整備されていた。満鉄直営ホテルブランドであったヤマトホテルに限っては、大連・星ヶ浦・撫順・奉天・新京・哈爾浜に完成しており、ヤマトホテルの案内や広告は多数掲載されていた。（図6：哈爾賓ヤマトホテル案内）。著名なホテルも大都市には数多く建てられ、具体例としては、ナニワホテル・天満屋ホテル・錦水ホテル・遼陽館・平和ホテルなどが挙げられる[33]。当時のヤマトホテルについては、昭和11年（1936年）満州を旅した米教授キャンベルが

「又特にお褒めし度いんですが…新京ヤマトホテルの朝食は素晴らしく良いものでした。ほんとにこの旅行中今まで経験した内で一段と良かつたと思ひます」

と述べており[34]、このようなホテル評の記事も多く掲載されていた。また

「どんな大ホテルでも一日三万圓位の安い室のない所はありません。なるべくいいホテルの安い室に泊つて。ホテルは大概食事は別になつてゐますから、遠慮なく外で飯を食ふことです。これが最も要領のいい泊り方だと思ひます」

などといった効率よくホテルを利用していく方法が紹介された[35]。しかし一方では、日本から来た旅行者の感想として、満州にある日本旅館は公式にのっとったようにどこの宿でも刺身・吸物・焼肴・酢の物を提供することに対し、もっと地方色を出した料理が食べたいとのも寄せられていた。しかし、満州は食料原料が少なく、その土地の物だけで作ると見た目も悪く、採算が取れないなどといった問題が未だ存在していたのも事実である[36]。

また満州の宿泊施設の特徴として、少ないながらも温泉が存在していたことが挙げられる。代表的な温泉地としては、奉山線沿線にあった興城温泉である。ここはもともと張学良の保養地でもあったところで、涌出量も豊富なことから、宿泊料や温泉の効能にも触れていることを紹介する記事が掲載されるなど（図7：興城温泉の宿泊施設案内）[37]、早くから注目されていた。昭和10年（1935年）8月には日本温泉協會への加入が決まり、本格的に整備が開始されるようになったのである[38]。

（四）各都市の主要観光スポットと土産物

次に旅行の醍醐味でもある満州各所の観光スポットや見所、土産物について述べていきたい。『旅行満洲』においても、第4巻第4号において、『満洲旅行特輯号』を組むなどし、読者に観光スポットなどを積極的にアピールしていた（図10：『満洲旅行特輯号』表紙）。しかし一概に観光スポットといっ

[32]『旅行満洲』第 2 巻第 2 号（昭和 10 年）、34 頁。
[33]『旅行満洲』第 4 巻第 4 号（昭和 12 年）、88 頁。
[34]『旅行満洲』第 3 巻第 9 号（昭和 11 年）、62 頁。
[35]『旅行満洲』第 2 巻第 3 号（昭和 10 年）、46 頁。
[36]『旅行満洲』第 4 巻第 3 号（昭和 12 年）、32 頁。
[37]『旅行満洲』第 2 巻第 1 号（昭和 10 年）、30 頁。
[38]『旅行満洲』第 2 巻第 5 号（昭和 10 年）、82 頁。

ても多種多様であった。そもそも満州観光の目的は、第一に戦跡・史跡めぐり、第二に異文化・民族風俗を知ること、第三に風光景色などを楽しむこと、第四に重工業など日本統治の模様（代表例は図15）を視察することにあった。この中でも満州旅行における最大のハイライトともいえるのは第一の戦績・史跡巡りであり、日清日露戦争、そして満州事変を経て、満州国の至る所に存在する古戦跡はもちろんのこと、満州における歴史とともに歩んできた各所の史跡であった。満州の発展の礎になったのは、日清日露戦争を経て、満州事変より各地で戦い続けた多くの同胞の血であり、そういった観点からも同じ国民として敬意を表し、去っていった同胞に思いを馳せることが戦績を巡る意義であると紹介されている[39]。以上から、ここでは戦績・史跡に特化して紹介していく。

まず大連周辺エリアであるが、戦跡といえば日清日露戦争の舞台となった旅順は外せないであろう。代表的なところとしては、二〇三高地・東鶏冠山北堡塁・戦役記念館・白玉山などがある（図8：旅順のグラビア写真）。また大連から沿線伝いに北上すると、金州と遼陽を通る。金州は日清日露両戦役、遼陽は日露戦争の激戦地になったところであり、金州には金州城などの他に日露戦争で活躍した三烈士[40]の忠魂碑[41]がある一方で、遼陽にも遼陽城などをはじめ、当時の弾痕などが今でも数多く残っており、当時の戦いの激しさを物語っていた[42]。さらに北上すると史跡・戦跡部門では最も欠かせない街、奉天に至る。張作霖爆殺事件の現場であったり、満州事変勃発の舞台となった北大営や柳条湖など、奉天の史跡として馴染み深いものが市の北方にある。また日露戦争において奉天大会戦が行われた舞台でもある。また史跡という観点では、日本統治以前に満州を牛耳っていた張氏の本拠地がここ奉天であり、張氏の旧宅が奉天城内に残されていた[43]。そして広大な敷地を持つ奉天を代表する史跡が昭陵（北陵）と福陵（東陵）であり、これは後金（後の清）一代目ヌルハチと二代目ホンタイジの墓である[44]。長期間にわたって中国全土を統治していた清が北京に首都を移す前の首都も奉天であり、後の康熙帝や乾隆帝も度々ここを訪れ、改築などを行っていたといわれる。そして新興満州国の新たな観光名所として注目されていたのが、熱河エリアにある承徳である。承徳が注目される理由としては、北京から1日で行けるという近さであり、北京や万里の長城の東端である山海関とタイアップしてツーリストを誘致することが可能な立地の良さがあった[45]。この承徳の中心スポットといえるのが、避暑山荘である。同地は既述した清の4代皇帝康熙帝が離宮として1790年に建築した広大な寺院群である。避暑山荘には歴代の皇帝が複数回にわたって行幸しており、山荘の内外に数多くの寺廟を建てていった（図9：避暑山荘の全体図）[46]。1994年には世界遺産に登録されたが、当時の山荘は山水秀麗であったが、修復が必要な箇所も多く、観光ルートや観光ホテルの整備が急務であったとされていた[47]。戦跡・史跡以外の観光スポットをとしては、満州が誇る撫順炭坑や首都新京の街並み、ハルビンの露西亜風の街並みなど数多く存在した。

最後に、満州旅行における代表的な土産物を紹介する。土産物は旅行において欠かすことない要素の一つであり、各地に数多くの土産物屋が軒を連ねており、『旅行満洲』内における広告の中でも最も

---

39『旅行満洲』第 4 巻第 4 号（昭和 12 年）、20 頁。
40 脇光三・沖禎介・横川省三の三氏の総称で、日露戦争時、民間の特殊工作員としてロシア軍の後方攪乱のため鉄橋爆破に従事したが、失敗して捕らえられ処刑された。
41『旅行満洲』第 4 巻第 4 号（昭和 12 年）、62 頁。
42『旅行満洲』第 4 巻第 4 号（昭和 12 年）、22 頁。
43『旅行満洲』第 2 巻第 2 号（昭和 10 年）、43 頁。
44『旅行満洲』第 1 巻第 2 号（昭和 9 年）、11 頁。
45『旅行満洲』第 3 巻第 10 号（昭和 11 年）、28 頁。
46『旅行満洲』第 3 巻第 10 号（昭和 11 年）、20 頁。
47 前掲、『旅行満洲』第 3 巻第 10 号、28 頁。

数が多かったのが土産物関連であった。また日本国際観光局の統計によれば、日本において外国人客の消費する費用約9千万圓の内、2千万圓以上が土産物の購入費、すなわち全消費額の5分の1であると言われていた[48]。こうした観点からも、満州における外客誘致において土産物産業は重要視されていたのではないかと推測できる。

代表的な土産物としては、絵葉書やトランプが挙げられる。これらは安さが売りであり、修学旅行に訪れる学生が多く買うという[49]。満州土産の重要な要素として、満州色彩が強いもの、軽くてかさ張らぬもの、安価なるものが求められていた[50]。また食料品は旅行客に最もポピュラーな土産として有名であった。これは全満の主要都市すべてに共通し、代表的なものとしては、ウイスキーやウォッカ等の洋酒類をはじめ、砂糖類・高粱飴・ロシア飴・支那素麺・羊羹・甘栗など多種多様である。さらに満州らしいお土産といえば、郷土人形や琥珀・石炭細工、翡翠などの宝石類、毛皮類などがある。琥珀や石炭細工は、撫順原産であるが故に満州を代表する土産と言ってよい[51]。しかし一方では

「満洲の代表的文化都市たる大連にして、然かも来満邦人の大部分が一度は立ち寄る大連にして、食料品以外には、これとして特筆する程の名産を持たぬといふ事は恥ではないか」

というように、満州らしい土産の少なさに批判が集まっていた[52]。既述した食料品やトランプなどは総じて、日本国内で買うより安いからという理由であり、満州原産でないにも関わらず満州土産となっていたからである。日本の土産物事情を取り上げ、昭和15年（1940年）開催の東京オリンピックを控え、満州視察団増加の一途を辿る状況において、満州の郷土色溢れる土産物創出に尽力すべきとの意見さえ存在していたのである[53]。

（五）旅行における注意事項 - 税関に関してー

ここでは、満州を旅行する際に注意すべきことについて論及したい。満州への旅行は、一般的な国内旅行とは違い、初の海外旅行先としての特殊性を持っており、そうした観点で日本からの旅行者へ様々な注意喚起が雑誌内でされることも多かった。ここで、その中でも注視される税関について取り上げる。日本人旅行者にとってもちろんのことながら税関を通過するのは初めてということもあり、税関通過に関する注意が最も多くされ紹介されていたからである。

満州への旅行に際し、通る可能性のある税関は三か所存在した。一つ目は大連港もしくは関東州外に向かう場合大連駅で、二つ目は朝鮮との国境に当たる安東駅、三つ目に同じく朝鮮との国境にあたる図們駅もしくは上三峰駅にて行われる[54]。税関検査の内容は、一般的に携帯品は車内または船内で、託送手荷物はホームや検査所で行われ、大連港の場合、毛皮や宝石類などは輸入地市価の十割の輸入税、トランプ類は一組につき金50銭の骨牌税が出国する際に課せられるなど厳しいものであった[55]。これにより、入満する際は簡単に持ち込めたものの、出国する際に厳しくチェックされ、高い税金を取られる場合や、大連港が自由港であるが故、舶来品を安く購入できたものの、出国の際に課税され

48『旅行満洲』第 4 巻第 9 号（昭和 12 年）、110 頁。
49『旅行満洲』第 4 巻第 4 号（昭和 12 年）、74 頁。
50『旅行満洲』第 1 巻第 2 号（昭和 9 年）、3 頁。
51 前掲、『旅行満洲』第 4 巻第 4 号、74 頁。
52『旅行満洲』第 4 巻第 9 号（昭和 12 年）、110 頁。
53 同上。
54『旅行満洲』第 4 巻第 4（昭和 12 年）、100 頁。
55 同上。

て結局高い土産になってしまう場合も多かった[56]。また税関に対する不満はこれだけではなく、税関検査での待ち時間の長さや検査官の乱雑さが問題となっており、旅行者からも

「折角大連へ上陸し乍ら自分の手荷物を受取るのに二十分も三十分も待たされるのはやり切れない…（中略）…暫くして受け取つて来たスーツケースを見ると、大小五個の中無疵のものが一個きり、他はむごたらしきまでに革は傷つけられ金具は毀されてゐる。船室から荷物受渡し所迄搬ぶのに如何なる搬び方をしたらこんなに毀れるのだろうと思ふ程情ない姿になつて来た」[57]

「安東の税関は非常に手間取りますね。荷物を見るところが一つしかないのですが…」[58]

などと旅行記に書かれていたことからも読み取れる。入満する際もカメラや望遠鏡など、高価なものを携帯している際は、帰路の際に輸入品と勘違いされぬよう、予め日本を出国する際に税関において携帯証明を発行する必要があるなど[59]、現代の海外旅行と比べてもかなり税関が厳しかったことがわかる。

その他の注意喚起について、要塞地域や国境の軍事地域での撮影禁止[60]など、特殊な場合もあった。

（六）『旅行満洲』にみる日中戦争勃発の影響

ここでは本論文の研究対象期間限定の理由ともなった昭和12年（1937年）7月の日中戦争勃発による『旅行満洲』誌上にいかなる影響を与えたのか、その変化から考察を加えてみたい。

『旅行満洲』において、その関連の予兆ともいうべき初めて影響が初めて出たと考えられる記事は昭和12年（1937年）の3月号の巻末、「旅行相談」の欄に記載された国境地帯法の説明である。これは満州国勅令によって2月1日から施行された国境地帯の居住、旅行及移住に一定の制限を加える法律であり、対象地域を旅行及移動する場合、領事館警察署発給旅行許可証所持などが義務付けられるようになった[61]。中国をはじめとする国境地帯で緊張が高まっていたことがここからうかがえる。また日中戦争勃発後、影響が出てくる記事が現れたのは、昭和12年（1937年）の9月号である。その巻内では、北京や天津など、北支の概要（面積・人口・自治運動の歴史・交通・資源・主要都市etc）について項目ごとに詳しく紹介されていた[62]。日中戦争によって当時多くの国民にとって北支エリアが注目の的になっていたことが読み取れる。また同記事において北支旅行者への注意書きもされてあり、

「北支方面現在の狀勢に鑑み今回軍人、軍屬警察官…（中略）…職務上必要なる場合を除き一般日本人（半島人も）の北支方面への旅行…當分一定の制限を附することとなり、旅行または移住希望者は出發前所轄警察署の身分證明書を必要とすること」[63]

とあるところからも、日中戦争勃発にあたって、北支方面の旅行に制限がかかり始めていることが読み取れる。その他にも

「日支事變の重大事局に際し、日満支間のわが交通も常態を脱して整然たる統制下にあることは云ふまでもない。銃後の我々は旅行にも全き公徳の發露を見なければならない」[64]

と編集後記にもあり、日中戦争勃発直後の9月においては、旅行者に既に制限が徐々にかかり始めて

---

[56]『旅行満洲』第 2 巻第 4 号（昭和 10 年）、24 頁。
[57]『旅行満洲』第 3 巻第 4 号（昭和 11 年）、37 頁。
[58]『旅行満洲』第 3 巻第 10 号（昭和 11 年）、80 頁。
[59]『旅行満洲』第 4 巻第 4 号（昭和 12 年）、99 頁。
[60] 前掲、『旅行満洲』第 4 巻第 4 号、100 頁。
[61]『旅行満洲』第 4 巻第 3 号（昭和 12 年）、87 頁。
[62]『旅行満洲』第 4 巻第 9 号（昭和 12 年）、98 頁。
[63] 前掲、『旅行満洲』第 4 巻第 9 号、108 頁。
[64] 前掲、『旅行満洲』第 4 巻第 9 号、132 頁。

いたこと、しかしその一方で、完全な制限が未だかかっていなかったことからは、戦争の早期決着が楽観視されていたこともうかがえる。

## 第二節 満州旅行分析と広報による満州イメージ変化

前節で昭和初期の満州旅行の全容に言及したが、本節ではその満州旅行を来満者数や治安面、広報面などから分析しつつ、『旅行満洲』を通じた旅先としての満州イメージの変化について論及する。また満州旅行への日中戦争勃発の影響についても触れていく。

満州旅行を分析していく上で欠かせない事実として、治安問題が挙げられる。昭和8年（1931年）の満州事変後、満州国の統治下になった各地で地元民の反発が起き、彼らは匪賊となって旅行客や移民団を襲っていった。また新京以北の東清鉄道は未だロシアが所有していたこともあって、満州の中でも特に地方の田舎において、治安面での問題は山積みであった。治安に関しては旅行客にとっても関心が高く、

「…ここは山間の僻地であります。有名な匪賊の巣窟で、いつ何處から機関銃の猛襲を受けるか知れないと云う處で…（中略）…警備兵は絶えず威嚇射撃をボンボンとやり…（中略）…今朝方匪賊が村を焼き拂つて掠奪をしたと云つて今朝陽から来た日満連合の警察隊と交戦中とのこと、今日の朝陽発赤峰行きのバスは出発を見合わせた」[65]

といった匪賊の恐ろしさを描写する記事や、観光整備面の充実さと対照的に治安面の不安に言及している記事[66]なども多く掲載されていた。また

「裏へ参りますと満州人町とか申す市場がありまして、汚い店が軒を並べて居り…手筋や顔の皺に垢がたまつてゐる姿を見まして、生活程度の低い人達である事を知りました」[67]

とあるように、満州の主要都市といえども、一歩裏手に入れば阿片窟が存在したり[68]、乞食がたむろするなど、治安や衛生面に問題があったことがうかがえる。その他にも

「匪賊にやられた、襲はれたなと思つたら先づ窓から兩側を眺めて兩方からか、或は一方からのみ襲つて来るのかを確める必要がある。若し一方からのみだつた場合には片方の窓を開けて飛降り反對の方向に對して逃げることだ。之は汽車の蔭になつて匪賊の方には見えぬから確に成功する。現に土門嶺事件の時は一方襲撃だつたらしくこの手を利用して助かつた人がある」[69]

このような匪賊に襲われた際の逃避行動について解説している記事や、護身用の拳銃を販売する店の広告が複数回にわたって掲載されていた（図11：拳銃の広告）。これら治安面の問題と匪賊への恐怖は、確実に旅行客の数を減らし[70]、「治安面に問題があるようなまだまだ未開発の土地」という満州イメージを多くの日本国民が抱く原因になってしまったと考えられる。具体的には

「匪賊に襲はれる恐しい満洲と、かねがね噂に聞かされ、色々想像して居りました…」[71]

という旅行記における記述からもそれはうかがえる。

このような治安面の改善のきっかけとなったのが、昭和10年（1935年）3月に北満鉄道（東清鉄道）

---

[65]『旅行満洲』第 2 巻第 4 号（昭和 10 年）、46 頁。
[66]『旅行満洲』第 3 巻第 4 号（昭和 11 年）、16 頁。
[67] 前掲、『旅行満洲』第 3 巻第 4 号、46 頁。
[68]『旅行満洲』第 2 巻第 1 号（昭和 10 年）、64 頁。
[69]『旅行満洲』第 2 巻第 5 号（昭和 10 年）、74 頁。
[70]『旅行満洲』第 3 巻第 4 号（昭和 11 年）、24 頁。
[71] 前掲、『旅行満洲』第 3 巻第 4 号、46 頁。

をロシアから買収したことである[72]。これにより治安面もさることながら、サービス面と旅行の利便性に多大なる寄与をすることになった。北鐵買収により、いわゆる満州全土の鉄道路線を一元経営・管理することが可能になり、サービス面はもちろんのこと、治安面で最も問題があった北満エリアの治安改善に本格的に乗り出すことができるようになったのである。まず治安面に関しては、日満軍警や鉄道従業員をはじめとし、「鐵道愛護村」という沿線の満人が自治体となった組織などによって、列車への匪賊の襲撃を抑え、鉄道の安全運行と定時運行に協力してくれるようになった[73]。また利便性において、最も大きな出来事は、昭和10年（1935年）9月1日から始まった世界最高列車「あじあ号」による大連ハルビンの直通運転である[74]。「あじあ号」は満鉄が世界に誇る列車であり、当時の満州国を国内外にアピールする絶好の題材であったことからも、第2巻第5号（昭和10年9月1日発行）には、「あじあ号」の大連・ハルビン直通に合わせた特集が組まれていた。表紙や広告を含め、巻頭に10頁にもわたるグラビア写真が掲載され（図12：「あじあ号」のグラビア写真)、特集記事としては15頁ほどにわたっており、読み手に「あじあ号」への乗車欲を高めるものとなっている。具体的には、「あじあ号」車内の様子を旅行記とともに紹介している記事があり、そこには

「「あじあ」の展望室は最後部なので、最も振動が激しい、と聞いてゐたが、乗つて見ると普通列車と少しも變りはない…（中略）…普通列車では車内の炎熱にやりきれなくなつて涼をとりに出るデッキが「あじあ」ではドアーを排してデッキへ出るといきなりムーと生温い空氣のいきれが面を撃つて思はずたぢたぢとなると云へば凡そ「あじあ」の冷房装置が、どんな完全なものであるか想像がつくであらう」

と、揺れが少なく冷房完備の快適な展望車が連結されていることが紹介されていた[75]。また「あじあ号」の直通開始が与える影響について論じる記事が掲載されており、それには

「今日の「あじあ」直通は獨り交通界の慶事たるのみならず直接哈爾賓に長足の發展を約束付け延いては北満の開發に重大意義を有するもの」

などと記されていた[76]。その他にも、在上海アメリカンエキスプレス社[77]支配人セシル氏の旅の書簡が紹介されており、そこには「あじあ号」について

「小生は、鷗州及米國の殆ど總ての特別列車にて旅行せる事あるも、未だ嘗て眞に「あじあ」以上の列車を見ざりし事を申添候」[78]

と記述されており、読み手に「あじあ号」の素晴らしさ、そして満州のインフラ整備の発展度合を感じさせる記事になっている。またこれにより、朝大連を出れば、夕方には哈爾浜に着くといった満州国内の移動の迅速さ、乗り換えなしという利便性と合わせ、ますます北満エリアの発展が期待され始めた。その他にも、食堂車に日本語を話せる女給を置く[79]ことで、以前はロシア語しか通じなかった北満エリア[80]への対応を行ったり、食堂車のサービスの一環として握り鮨をはじめたことや[81]、旅客の

---

[72]『旅行満洲』第 2 巻第 3 号（昭和 10 年）26 頁。
[73] 同上。
[74]『旅行満洲』第 2 巻第 5 号（昭和 10 年）18 頁。
[75]『旅行満洲』第 2 巻第 5 号（昭和 10 年）28 頁。
[76] 前掲、『旅行満洲』第 2 巻第 5 号、36 頁。
[77] アメリカンエキスプレス社は 1850 年に運輸業を始めたのを皮切りに、旅行業や金融業さえも手掛けていたアメリカの一大会社であり、当時は海外旅行をするアメリカ人旅行者のサポートのため、世界各国に事務所を構えていた
[78] 前掲、『旅行満洲』第 2 巻第 5 号、19 頁
[79]『旅行満洲』第 2 巻第 3 号（昭和 10 年）、79 頁。
[80]『旅行満洲』第 4 巻第 6 号（昭和 12 年）、74 頁。

増加に対応して三等寝台車を連結し寝台車は革張りのソファーにすることなど[82]、サービス面において改善と刷新が進められたのである。もっとも、既述した治安面の問題は、北鐵買収後にも多く掲載されていたので、各所で治安改善は進んでいたものの、未だ全満において徹底されていなかったことが読み取れる。治安に関する言及がほとんどなくなってきたのは、昭和11年（1936年）の後半になってからであり、それは昭和11年（1936年）11月の次の承徳の旅行記の一節に示されている。すなわち、

「此の頃の満州も静まりましたねえ…こんなところまで女の一人旅ができるんですからなあ」[83]

とする。承徳といういわば満州の片田舎においても、女性が一人旅できる状況になったという、全満における治安の安定化を推測できる重要な証言である。

また来満者数という観点では、『旅行満洲』内に掲載されたデータとしては少なかったものの、満州事変後昭和6年（1931年）～昭和10年（1935年）の来満視察団総旅客数の推移は表1の通りである[84]。また奉天ヤマトホテルの昭和4年度～10年度までの営業収入と宿泊延人員は表2の通りである[85]。表1、2からも読み取れるように、全体を通して入満者数は漸次増え続けていたことからも、北鐵買収が契機となったサービス面での向上と全満を通じた治安の安定化が図られたことは旅行客や視察団の満州旅行欲を高めつつあったことがわかる。

その一方で治安面の不安を取り除くことはなかなか難しく、北鐵買収後も日本国内の満州イメージは変化しなったと思われる。

「只満洲と聞いただけで、匪賊と阿片と何か荒れ果てた世紀末の感じを受けて見るのが怖い様です」[86]

という当時女優であった三宅邦子の言葉は、それを象徴している。また、『旅行満洲』が満州国建国5周年を迎えた春に記念として創刊した『満州旅行特輯号』の巻頭において

「祖國の人々の認識や如何、未だに、日露戦争時代の、赤い夕陽と荒漠千里の満洲感のみが脳裡に印象付けられてゐる」[87]

と、満州国の旅客課長が述べていることからも、満州イメージの転機について手応えをあまり感じていなかったことがうかがえる。満州国としては昔ながらの「殺風景で荒れ果てた未発達の地域」というイメージを覆したいという思いであっただろう。そうした考えは当時の日本政府にも共通する。昭和10年～11年の日本は、「1935年・36年危機」と呼ばれる時代であった。1933年の国際連盟脱退声明が発効する1935年、そして1936年に延長を迎えるワシントン海軍軍縮条約の破棄に向けた予備交渉が始まるなど、日本が世界から孤立を深めていった時代であり、メディアもこれを盛んに掻き立てていた。こうした時流にあって、日本政府は従来より外客誘致による政治的対外宣伝に必死になってきており、強行手段で作り上げた満州国を世界各国の視察団に旅行してもらい、その発展を伝えてもらうことで、日本の対外政策の正当性をアピールしたかったと考えられる。それと同時に国民の満州観を変える意図もあったと思われる。こうした観点からも、満州国の外客誘致は脚光を浴びており、その最前線に雑誌『旅行満洲』は位置していたのである。こうした前提を踏まえ、ここからは広報面から満州旅行を分析し、引き続き満州イメージについて探求していく。

満州旅行にいかなる層の人々を誘致したいのか、誌面を分析するとそれは学生層と教育者であった

---

[81]『旅行満洲』第 2 巻第 4 号（昭和 10 年）、79 頁。
[82] 前掲、『旅行満洲』第 2 巻第 4 号、78 頁。
[83]『旅行満洲』第 3 巻第 10 号（昭和 11 年）、44 頁。
[84]『旅行満洲』第 3 巻第 4 号（昭和 11 年）、25 頁。
[85]『旅行満洲』第 3 巻第 5 号（昭和 11 年）、32 頁。
[86] 前掲、『旅行満洲』第 3 巻第 5 号、18 頁。
[87] 前掲、『旅行満洲』第 4 巻第 4 号、14 頁。

と考えられる。実際『旅行満洲』内においてもそれらが真のターゲットであるかのような記述や記事が多い。例えば関東州廳長官竹下豊治は、

「旅行者殊に學生團體に対しては皇軍活動の跡を偲ぶべき地點の観察を逸せしめざること…（中略）…旅館を簡易化し殊に學生團體に對しては各地に實費宿泊所を設置すること」

などと、旅行者の中でも学生層に着眼することを明言している[88]。他にも日露戦争直後から昭和15年にかけて、小学校教員の「支那満鮮視察旅行」が外務省や文部省、道府県教育会、鉄道局など多彩な機関によって数多く行われた[89]。件数としては、兵庫県を例にとると、昭和3年（1927年）から昭和15年（1940年）までで合計13回実施していた[90]。彼らは現地で日本人の支援を受け、各地の史跡や官庁などを見学、教育関連のイベントに参加したりしていたようである[91]。これらの視察旅行は、時代の変遷に合わせ、戦跡巡りや満州移民地視察など目的を変えて実施した自治体もあった[92]。また満州旅行宣伝の面で特筆すべきは、昭和3年（1929年）に満鉄から白樺派メンバーに対し、紀行文を書くことを条件に満州と中国への招待旅行の申し出が行われ、志賀直哉と里見弴[93]の二人が満州へと旅立っている[94]。これも前節第1項で既述した満鉄による満州PR戦略の一環である。その旅行記においても

「哈爾賓行きの東支鉄道に乗る。かねて噂には聞いていたが、ここの一等寝台というものには、志賀も私も、ちょいと度肝をぬかれた態だ。広さ、天井の高さ、内地のそれと較べて、かれこれ倍もあるかと思われるほどで、壁紙なども、重々しく落ち着いているし、とても汽車のなかという感じはしない」（里美弴『満支一見』）[95]

などのように旅行中の出来事を細かく記していた。また映画界においても、満鉄映画製作所が制作した満鉄・鉄道総局・大阪商船・鉄道省と諸々沿線・沿海の風景などを撮影した「内鮮満周遊映画」が昭和13年（1938年）春に公開されることが決まっているなど[96]、一般大衆向けのアピール方法によって、より多くの人々に満州へのイメージを湧きやすくさせ、旅行欲を高めていこうとしていた。切符に関しても、学生割引や学校職員対象の割引などが充実していた[97]こともターゲットとして重視されていたことを物語る。彼ら教育者や学生を重視する理由としては、満州の実態をより多くの人々に還元できる影響を期待できるからだと思われる。教育者は学生を教える立場から、改めて隣国や朝鮮の実情を視察することで、知見を広め、教育後教育において還元するといった目的があったと考えられる。次なる日本を担っていく学生に一早く満州への価値観を変えてもらうとともに、満州国への理解と統治業績のアピールも兼ねていたとうかがえる。以上のように『旅行満洲』を通じて、学生層や教育者を中心にしたアプローチを行い、彼らに満州に来てもらうことでイメージの変化にこぎ着けようとしていたことが明らかになった。

---

88『旅行満洲』第 3 巻第 5 号（昭和 11 年）、17 頁。

89 宗安寧「兵庫県教育会による小学校教員の『支那満鮮視察旅行』に関する研究－『満州国』建国前を中心にして－」（神戸大学教育学会『研究論叢』第 15 号、平成 20 年）

90 宗安寧「満州移民地視察のための小学校教員の『満鮮視察旅行』：秋田県教育会主催を事例にして」（神戸大学教育学会『研究論叢』第 19 号、平成 24 年）

91 前掲、「兵庫県教育会による小学校教員の「支那満鮮視察旅行」に関する研究ー「満州国」建国前を中心にしてー」。

92 前掲、「満州移民地視察のための小学校教員の「満鮮視察旅行」：秋田県教育会主催を事例にして」。

93 白樺派の小説家であり、本名は山内英夫。

94 前掲、小島英俊『文豪たちの大陸横断鉄道』、47 頁。

95 前掲, 小島英俊『文豪たちの大陸横断鉄道』、49 頁。

96『旅行満洲』第 4 号第 1 号（昭和 12 年）、146 頁。

97『旅行満洲』第 4 巻第 4 号（昭和 11 年、93 頁。

以上『旅行満洲』を通じ広報により、満州に旅行者を誘致し、それによる満州イメージの一新を目指す一種のプロパガンダ策をみてきた。しかしその一方で、『旅行満洲』を通じた昭和初期の満州イメージは、「殺風景で何もない未開発の土地」という従前のイメージはさほど変わらなかったのではないかという結論に至った。以下、その点について確認してみたい。

一点目は満州への旅費の高さである。実際の来満者のデータとしては既述した通り、団体数や全体数などしか記述されておらず推測の域は出ないのであるが、学生だけでの個人旅行はもちろんのこと、修学旅行でさえも大多数の学校が行けるほど安い旅行先ではなかったのではないかということである。これは学生に限らず、一般旅客も同じであったと考えられる。第2章第1節の2項目で一般旅程と費用概算を紹介したが、そこに既述した①のルートを取ってみても、20人以上の団体旅行の場合、2等で208圓00銭、3等で137圓58銭、個人旅行の場合にもなると2等で258圓46銭、3等で163圓14圓であった。当時の一般的な給与と比較すると、例えば陸軍の軍曹で月30圓前後（昭和18年）[98]、勤労者世帯実月収入125圓（昭和15年）[99]だったので、いかにその旅行費が高額だったかわかる。国や自治体が出資してくれる団体旅行はまだしも、満州への個人旅行は治安面も含め、意外とハードルが高い旅行先だったのではないかと推測される。実際のところ、『旅行満洲』内にも

「特に満州では肩書がものを云ふ所で、内地から旅行する時は、出来るだけ多くの肩書のある名刺を作つて行くべき國である…」[100]

であったり、

「今日満洲を旅行する人々は、大部分内地主要都市の一流旅館ホテルを利用してゐる人であり、歐米旅行も何度かした人々であるからで、これら旅行慣れた人は…」[101]

といった記述からも、当時満州を旅行していた人々は大半が日本国内はもちろんのこと、海外旅行にも惜しみなくお金を投与できるほどの上位階級もしくは富豪が多かったのではないかと推測できる。

二点目として、『旅行満洲』の政治性の低さである。『旅行満洲』を概観すると、ほとんど政治の手が加わっておらず、満州の現状をありのまま伝えていた点である。既述の治安面などは満州への旅行欲を下げるのみならず、従前の満州イメージを固定化してしまう要因になりかねず、本来なら隠したいと思うような内容である。葉書回答も同様で、満州での感想について否定的な回答をしている人を載せないという編集もできたはずである。また都市の描写においても、大連であれば、近代的に発展した都市を日本の満州統治の実績としてアピールするといった、政治的宣伝のようなものも見受けられなかった。ハルビンにおいても同様であり、当時の国際情勢としては五ヵ年計画で軍備増強を進めるソ連への警戒が政府や軍の間にあったのだが、そのような警戒は書かれておらず、むしろロシア情趣の入った街を次のように好意的に描写している。

「東洋のモスコウたらしむる可く、建築様式等全て本國のそれに習つて造られたもの丈に、冬のそして雪が降りだす頃になると、急にエキゾチツクな、小ウルサク申せば文學的色彩を帯びて来るのである」[102]

このような政府の手が加わっておらず、ありのままの満州を伝えている『旅行満洲』の特徴は、満州国の正当性をアピールし、教員や学生層をターゲットにした旅客誘致策が行われていた現状とは相

98 大濱徹也・小沢郁郎『帝国陸海軍事典』（同成社、平成 7 年）
99『家計調査年報』（総務省統計局、昭和 15 年）
100『旅行満洲』第 2 巻第 3 号（昭和 10 年）、35 頁。
101『旅行満洲』第 3 巻第 5 号（昭和 11 年）、32 頁。
102『旅行満洲』第 4 巻第 8 号（昭和 12 年）、83 頁。

反するものである。実際のところ、当時の日本政府も満州への外客誘致に関してプロパガンダを行っていた。それは昭和8年にアメリカの雑誌『アメリカン・ボーイ』の懸賞論文当選の三少年などの内鮮満への招待旅行であり、もう一つは昭和11年国際観光局[103]によるアメリカから15名のハイスクール女教員の招請旅行である[104]。三少年の旅行談の内容では

「此度の満州国視察でその以上な発達、成長振りに只々感嘆の外ありませんでした。満州国の住民は結局仕合わせだと思います。…満州国に関して取っている日本の態度も理解することが出来ました」

など、満州国の良さをアピールするものばかりであり、何一つ日本や満州への不満などは述べられていないのである[105]。これは女教員の旅行談でも同様であり、これらも政府の圧力がかかっていた典型的外客誘致プロパガンダといえよう[106]。以上から、『旅行満洲』の政治性の薄さによって、ありのままの満州の様子が伝わってしまい、外客誘致宣伝の効果はあまり上がらなかったと推測される。

以上二点の考察から、実際に満州に行くためには資金が豊富であった学校を除き、大半が裕福な世帯であるとともに、『旅行満洲』はプロパガンダ性が薄く、治安面の描写など満州の現実を公平に伝えていたため、若年層をうまく満州へ勧誘できなかったことに繋がったともいえる。確かに雑誌の写真などを見てイメージが変わる場合もあり、各主要都市や主要観光スポットを描写する記事も多かったことから、日露戦争時代からのイメージが全く変わっていないとは言えないであろう。しかし、『旅行満洲』の流通が主に満州国内であったとの前提に立っても、満州の不都合な現実を隠すことはできにくく、同誌を通じた昭和初期の満州イメージは、一部の日本人を除き、未だ日露戦争時代とあまり変わらぬ「殺風景であまり発展していないフロンティアのような隣国」といえたのではないかと考えることができる。これは既述した満州国建国5周年記念の満州旅行特輯号の巻頭言などが象徴的である。満州は隣国、しかし行くとなれば旅費も高く治安のリスクも付きまとう。満州は昭和初期の日本人にとって、近いけれども遠い国だったのではないだろうか。もっとも、本稿の研究対象範囲以降の巻を分析し続ければ、また新たな満州イメージが出てくるかもしれない。満洲イメージの変遷については今後の課題としたい。

## 第三章『旅行満洲』にみる満州主要都市イメージ

本章では、『旅行満洲』を通じた満州主要都市イメージに焦点を当て考察する。ここでは大連とハルビンを中心に、各都市に対するイメージを分析する。

### 第一節 大連

大連周辺エリアの観光スポットは既に紹介したが、本節では大連自体を取り上げる。大連はロシア統治時代を経て、当時は関東州の中心であり、満州の玄関口であった（図16：当時の大連市街図）。したがって満州旅行者にとって一度は必ず訪れる都市であり、そうした観点からも大連は『旅行満洲』においても数多く取り上げられた。大連の主なスポットといえば、満鉄本社をはじめ、大広場（現在

103 国際観光局とは昭和 5 年（1930 年）4 月に国際観光政策を担う初の中央行政組織として誕生した。
104『旅行満洲』「近代日本の外客誘致政策」、198 頁。
105 前掲、牧村理浩「近代日本の外客誘致政策」、199 頁。
106 前掲、牧村理浩「近代日本の外客誘致政策」、198 頁～199 頁。

の中山広場）・満州資源館・忠魂碑・露天市場・連鎖街（当時の歓楽街）・星ヶ浦などが挙げられ、誌内でも当時の写真がいくつか掲載されていた。（図17&18：当時と現在の大連大広場、図19：当時の日本橋付近の様子、図20：当時の大連駅、図21&22：当時と現在の満鉄本社、図23：当時の大連港ターミナル）[107]。これらのスポットをまわる観光ルートバスも存在した他、大連から旅順へ向かう道路は旅大道路と言われ、満州の中でも一大風光明媚な道路として有名であった。この旅大道路と組み合わせた大連周辺のハイキングコースの案内[108]なども複数回掲載されていた。大連は満州の玄関口ということで、発展の速度が他都市と比べ早く、一方で観光スポットと言える場所が多くないこともあって、既述の大連周辺エリアとは異なり、観光地としてではなく、満州を代表する近代都市として次のように描かれることが多かった。例えば

「満州の大玄関・大連埠頭に四日目に上陸いたしました。想像より以上立派な設備で、而も桟橋や倉庫は完全なコンクリート造りで…（中略）…自動車や電車が絶えず交通して居り、何處でも續く廣いアスファルトの道路があり、アメリカに負けぬ立派な建物が聳えて居りますので、さてはアメリカに逆戻りしたのではあるまいかと…（中略）…夜は夜店がづらりと竝び、其賑やかさは東京の本物の銀座を思はせました」[109]

であったり、

「胡藤の街は又海のある都です…（中略）…香り高い胡藤の匂ひが失はれる頃、海から送る潮風の香りが街一ぱいに漂ひ初めます…（中略）…赤い太陽が胡藤の杜に沈みかける頃、この街は俄かに夜の活動を初めます。さわやかな夜風が街一ぱいに廣がつて五色のネオンサインは夜空に点滅し、そぞろに人々を遊歩に誘ひます」[110]

との記述が代表的である。また大連には露西亜統治時代の遺構がロシア人街という名で残っているなど[111]、歴史的史跡も多い街として描かれている。加えて大連をイメージづけるもう一つの大きな要素として、星ヶ浦の存在がある。星ヶ浦は大連郊外にある海沿いのエリアのことを指し、海岸沿いにはゴルフ場とともに、別荘が多く立ち並び[112]、春には桜の名所[113]として、夏には海水浴目当てに多くの人が詰めかける満州の一大リゾート地であったため、巻頭のグラビア写真などでも季節によって星ヶ浦の様子が掲載されている。（図24：星ヶ浦のグラビア写真）[114]。元々は満鉄初代総裁の後藤新平が自身の功績を後世に残すために整備したとされる星ヶ浦一帯は、現在も星海広場と名を変え、大連市民の憩いの場になっている。星ヶ浦には当時ヤマトホテルがあったこともあり、その描写は『旅行満洲』にも次のように数多く掲載されており

「西門から入つて後藤伯の銅像の丘に上る。大きな眺望だ。水平の一線に傅説的な數箇の島を點在して海も空も一面透明なコバルト、この海を曙の濱と黄昏の濱を左右に中央に突出した岬霞半島が裁断して、素晴らしい夏雲と良いコントラスト。星が降って岩礁となつたと言う黒石礁の傳説に因んで星ヶ浦と名附けたのだが全くこの浦にふさはしい名稱である」[115]

といった一文が代表的である。

---

[107]『旅行満洲』第 4 巻第 4 号（昭和 12 年）、104 頁。
[108]『旅行満洲』第 2 巻第 3 号（昭和 10 年）、36 頁。
[109]『旅行満洲』第 3 巻第 4 号（昭和 11 年）、46 頁。
[110]『旅行満洲』第 4 巻第 7 号（昭和 12 年）、51 頁。
[111]『旅行満洲』第 3 巻第 8 号（昭和 11 年）、84 頁。
[112]『旅行満洲』第 2 巻第 5 号（昭和 10 年）、72 頁。
[113] 前掲、『旅行満洲』第 4 巻第 4 号、172 頁。
[114] 前掲、『旅行満洲』第 4 号第 7 号、4 頁。
[115] 前掲、『旅行満洲』第 4 号第 7 号、98 頁。

以上の点から、大連の都市イメージとしては、満州の玄関口として相応しく発展した満州都市のパイオニアとしてのものであったと思われる。満州唯一の自由港であり、露西亜統治時代の遺構など日清日露戦争期から続く歴史的史跡とともに、最先端の文化、旅大道路に代表される風光明媚な自然と避暑地である星ヶ浦を擁しつつ、近代的な街並みとの融合が見事にマッチした大連は、まさに満州を代表する最先端の国際都市であったと推測できる。そうした点からも、潮風香るなんとなく自由で広々とした近代的国際都市という[116]、既述した昔ながらの満州イメージとは一線を画するものイメージがあったのではないかと考えられる。

## 第二節 ハルビン

本節ではハルビンを取り上げる。ハルビンは満州の主要都市の中でも異質の存在である。それは日清日露戦争後もロシアの統治下におかれ、満州国の管轄下に置かれたのが昭和10年（1935年）という遅さからきている。ハルビンに対する事変前のイメージとしては、同じ満州といって良いのかわからないほど果てしなく遠い場所というイメージであった。事変前のハルビンに行くには、新京（当時は長春）で一旦東清鉄道に乗り換えることが必要であり、車内でもロシア語しか通じないなど[117]、完全なる異国の地であったためである。『旅行満洲』においても、ハルビンは本当に程遠い場所だったとの印象が事変前にはあったとの記述がある[118]。そのようなハルビンのイメージを大きく変えるきっかけとなったのが、前章第2節でも既述した昭和10年（1935年）3月の北満鉄道（東清鉄道）買収である[119]。これによって、既述したように治安面やサービス面における改善が施されたのはもちろんのこと、「あじあ号」のハルビン直通運転開始など[120]、北満エリアへの旅客誘致策が本格化し、北満の中心地であるハルビンがこれまで以上に注目を集めるようになったのである。ハルビンには古蹟名勝などはあまりないこともあり、大連同様ハルビンの都市自体を描写する記述が数多く

「哈爾浜で所謂露西亜情緒なるものを味ははふとするには、モデルンホテルの結構なロシア料理でございましたが、同時に夜の町を見学すれば、キャバレーが賑はつて居ります。やはり昔ロシア人が築き上げた都で、ロシア化して居りまして、満洲風の気分を深く味はふことは出來ませんでしたが…」[121]

であったり、

「古風な寺院の見える石だたみの街路、想像よりもハルビンは素晴らしかつたのです。馬車ニーヤも堂々としたロシア人だし、金髪美女はドコでも歩いてゐるし、ロシア語の看板ばかりが目についてエキゾチツクな風景は完全に私を捉へてしまひました」[122]

というような描写が代表的であり、主にどの描写もハルビンが他都市とは一線を画したロシア情趣溢れる国際都市であるとのイメージを抱かせるものであった（図13：当時の聖ソフィア聖堂、図14：現在のロシア人街の一角にある旧ハルビン市公署、図15：現在の旧満鉄病院）。ハルビンを描写する記事は本論の全考察対象期間を通じて、同地に対するロシア風の雰囲気から感じる異国感を読者に強く印象付けるものになっている。

---

116『旅行満洲』第 3 巻第 5 号（昭和 11 年）、18 頁。
117『旅行満洲』第 4 巻第 6 号（昭和 12 年）、74 頁。
118『旅行満洲』第 2 巻第 4 号、（昭和 10 年）、54 頁。
119『旅行満洲』第 2 巻第 3 号（昭和 10 年）、26 頁。
120『旅行満洲』第 2 巻第 5 号（昭和 10 年）、18 頁。
121 前掲、『旅行満洲』第 3 巻第 5 号、36 頁。
122『旅行満洲』第 4 巻第 8 号（昭和 12 年）、83 頁。

しかしながら、以上のようなロシア化している街という単調なハルビンに対するイメージに変化が生まれ始めた。ハルビンに大量に住んでいたロシア人は、北鐵買収とともにその多くが帰国しはじめ、それと同時に多くの日本人が移住してきていたのである。これによってロシア一色であった街の雰囲気が徐々に薄れ、代わりに他都市と同様、日本色が強くなってくると同時に、そうした描写が増え始めたのである。例えば昭和11年（1936年）末~昭和12年（1937年）にかけて次のような記述が多くなってきている。

「國際都市として獨自の色彩を誇つてゐたハルビンも段々に色彩が薄らいで来たと、かう率直に旅人は云ふ。この色彩とは、帝政ロシア時代から赤色ロシアと變遷しても猶この都だけには流れてゐた一つの情緒なのであったが、時代は何時迄も然うしたロマンチツクな夢幻を容さなくなつたのだ」[123]とある。この他にも、ハルビン市民は皆、昔は国際都市人であるとの自覚を持っており、外出時にはきちんとした格好で出歩いていたものだが、最近では素足に下駄を引っかけて表通りを平気で歩く若者が多いといった描写[124]や、街の景観を害するという理由で全ての立ち看板が取り除かれた今、堂々と新たにできた祇園街の看板が姿を現したといった記述[125]、さらには昭和12年（1937年）6月1日から旧帝政ロシア帝国時代のものを漢字に翻訳し十八ロフカなどとして流用していた市街名を、南崗區や桃山通りなど全て日本色豊かな新街名に一斉に変更するといったニュース[126]など、全てにおいて街全体からロシア風の情趣が失われていきつつあるのが読み取れるとともに、読者のハルビンに対するイメージに揺らぎが生まれたのは間違いないであろうと考えられる。

一方で、既述したように、少なくなったとはいえども、ロシア色溢れるハルビンならではの記事が、日本色が強くなっていくことを記述している時期と並行して掲載され続けている。ハルビンの年中行事として有名な復活祭を紹介する記事[127]は典型的であり、未だロシア色が強く残っているハルビンを印象付けるものになっている。以上のことから推測するに、当時のハルビンへのイメージとは、未だロシア統治下の面影と情趣が色濃く残る街ではあるが、一方で北鐵買収とともに増えてきた日本人によって生み出された新たな日本色と、既存のロシア色とが並存した独特の色彩を放つ街として印象付けられていたのではないかと思われる。

## おわりに

本論文では雑誌『旅行満洲』を中心資料とし、昭和初期の満州旅行の実情を明かにしていくとともに、同誌を通じた満州とその都市へのイメージを考察した。

日本が時流に乗って外客誘致策に尽力する中、総合文化雑誌であった『旅行満洲』は満州事変後、満州における日本の業績を国内外にアピールするとともに、満州に対する日本人の認識向上とイメージ変化を意図して発刊された。内地の日本人に対してはもちろんのこと、満州内の隠れた魅力やスポット、レジャーなどを紹介し、それ以上に読者層として想定される満州在住の日本人に向け、満州に関する多種多様な情報を国内外に広報していった。

昭和初期の満州旅行はまさに黄金期を迎えていたといえよう。入満ルートが確立し、各地のホテル

123『旅行満洲』第 4 巻第 3 号（昭和 12 年）、26 頁。
124『旅行満洲』第 3 巻第 10 号（昭和 11 年）、56 頁。
125 前掲、『旅行満洲』第 3 巻第 10 号、62 頁。
126『旅行満洲』第 4 巻第 6 号（昭和 12 年）、116 頁。
127『旅行満洲』第 4 巻第 5 号（昭和 12 年）、52 頁。

は徐々に整備され、各交通手段がジャパン・ツーリスト・ビューローと連携を取り、各割引切符やツアーなどを駆使してより多くの層の旅行者を満州に呼び込もうとした。観光客受けする土産のオリジナリティ性の向上、史跡など観光スポットの充実化などに満州各地で取り組んでいった。その勢いは満鉄の北鐵買収、全満を通じての治安の安定化、サービス面の強化に繋がっていった。しかしながら、満州旅行費の高額、流通面を含めた宣伝性の低さなどをはじめ、最終的には旅行者の治安面に対する不安をぬぐい切れず、『旅行満洲』を通じて満州国が最も変えたかった「赤い夕陽が沈む荒野がひろがる未開拓の地」としての満州イメージを大きく崩すには至らなかったのではないだろうか。

しかしその中でも、都市イメージは少しずつ変化を見せ始めていた。大連は満州を代表するかのような自然・文化・歴史すべてを兼ね備えた近代的都市として多くの日本人に印象付けられていった。この大連の発達は、満州の玄関口としての自覚の表れでもあった。一方でハルビンは、ロシア色溢れる独自性を持ちつつも、日本色が台頭する中で、昔ながらの情趣が融合しながらも生き続けている街として読者には映っていったに違いないであろう。

結局のところ、昭和初期の段階では、満州全土に対する日本人の大多数のイメージが昔から変わることはなかった。しかし各都市のイメージは日本人個々の中で着実に変わりゆく途にあった。「満州は近くて遠い国」、多くの日本人がそう感じつつも、都市イメージの変化から満州というまだ見ぬフロンティアにロマンを感じ、想いを馳せはじめていたのではないだろうか。

表1　来満視察団総旅客数の推移

| 昭和6年（1931年） | 昭和7年（1932年） | 昭和9年（1934年） | 昭和10年（1935年） |
|---|---|---|---|
| 9097人 | 10372人 | 17950人 | 20419人 |

表2　奉天ヤマトホテルの営業収入と宿泊延人員の推移

| | 昭和4年 | 昭和5年 | 昭和6年 | 昭和7年 | 昭和8年 | 昭和9年 | 昭和10年 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 営業収入（圓） | 287464 | 237383 | 281300 | 351112 | 414267 | 420203 | 443192 |
| 宿泊延人員 | 16947人 | 14370人 | 18944人 | 18615人 | 20785人 | 20931人 | 19038人 |

図 1（当時の満州全図）

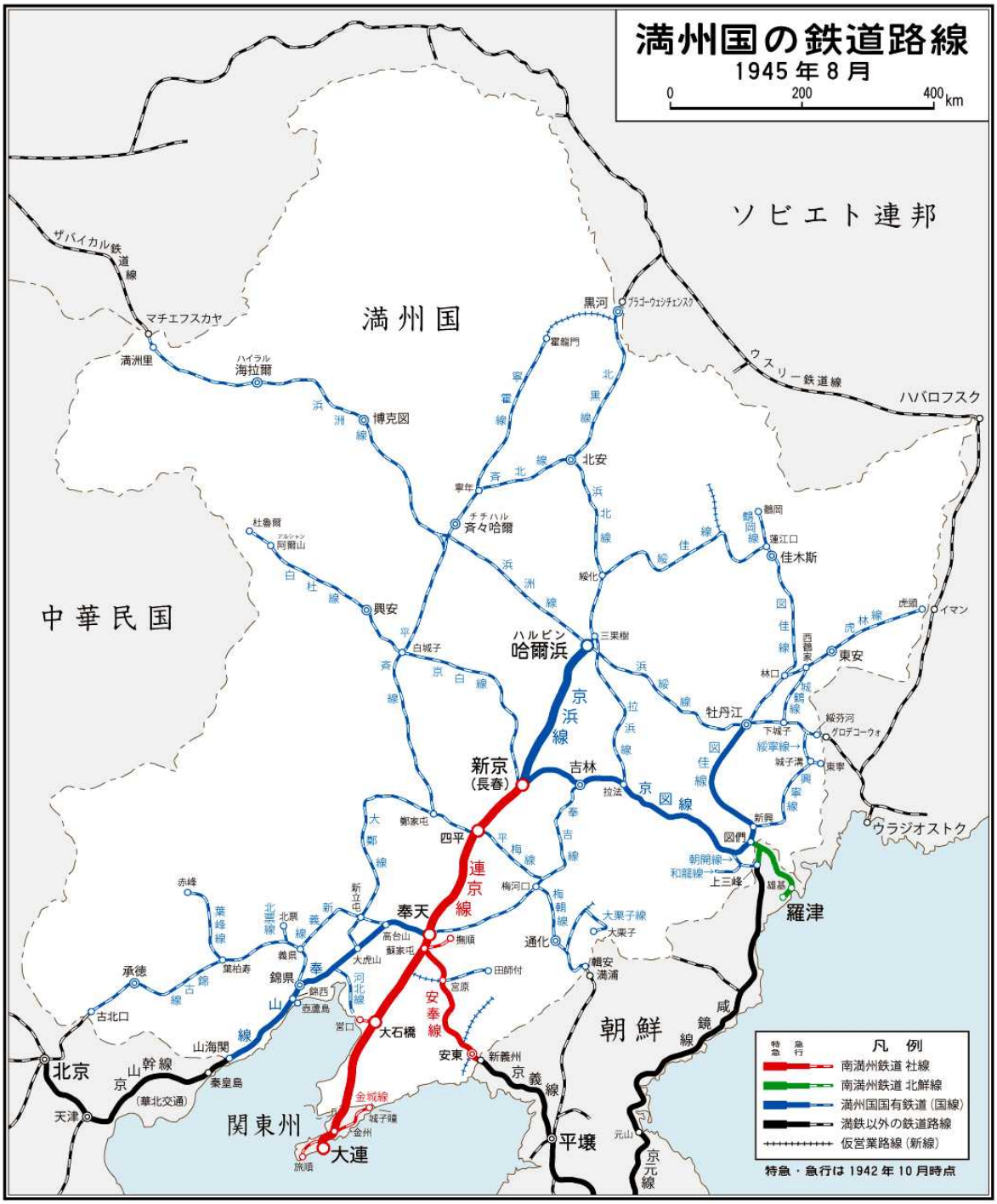

図 2（巻末の広告）

図 3

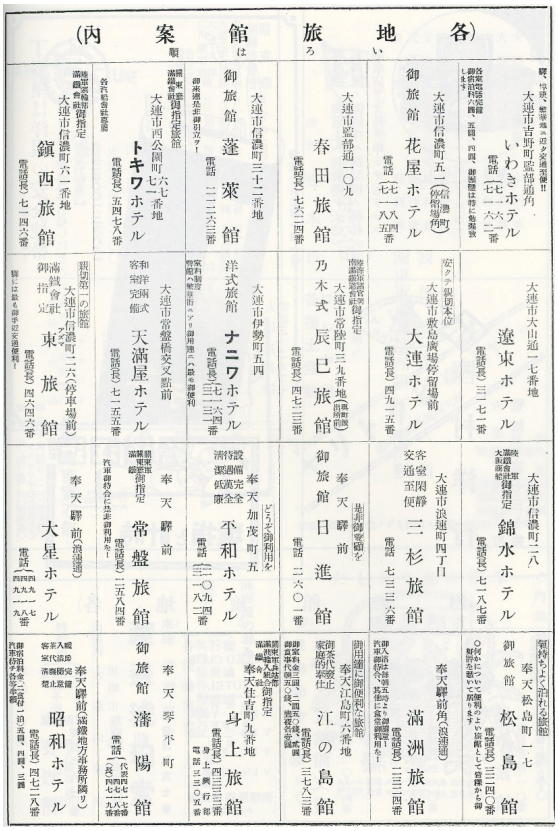

図 4（当時の時刻表）

図 5（ツーリストレポルタージュ）

図 6（哈爾賓ヤマトホテル案内）

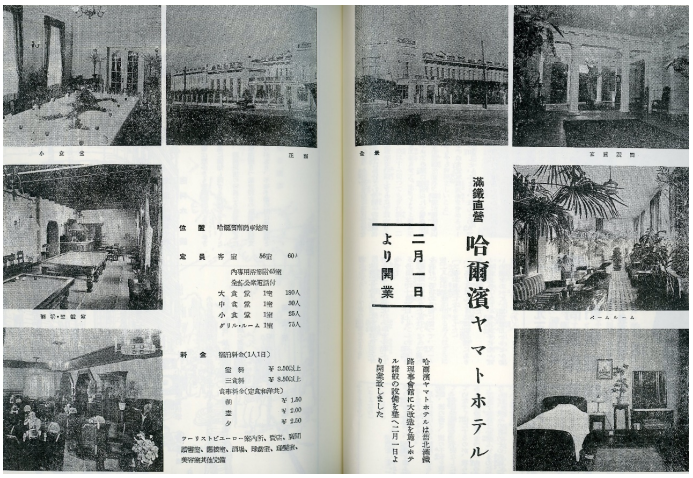


図 7（興城温泉の宿泊施設案内）

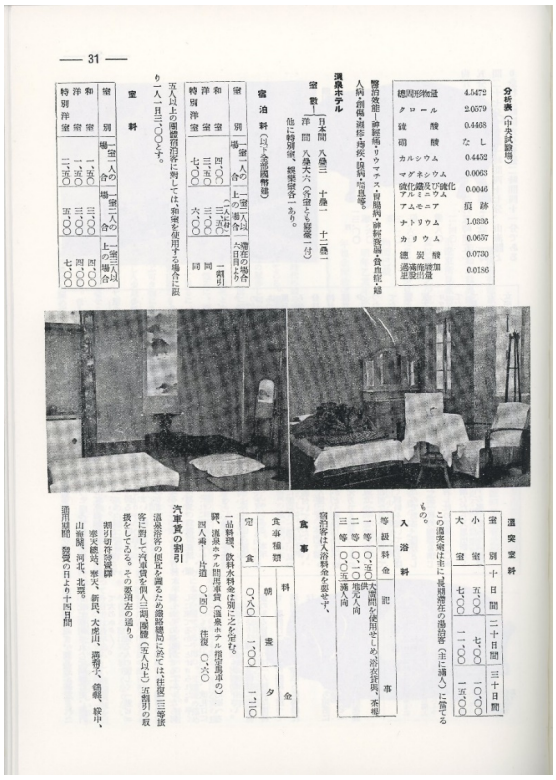

図 8（当時の旅順のグラビア写真）

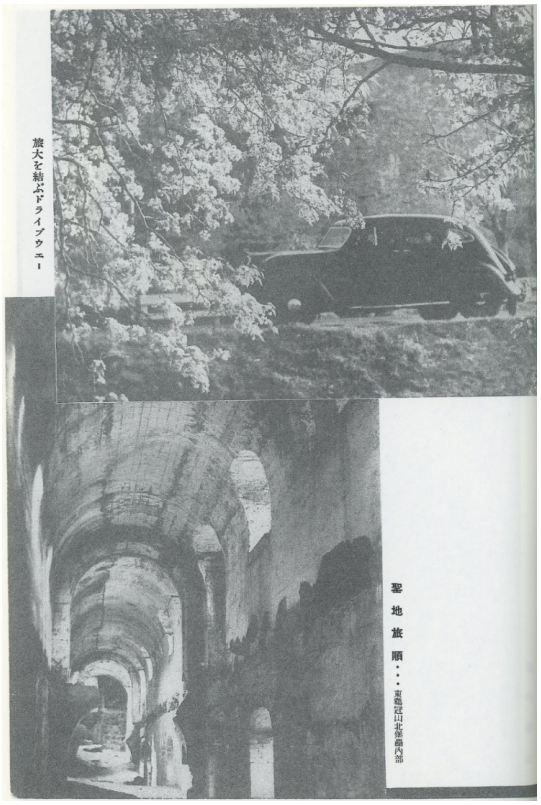


図 9（避暑山荘の全体図）

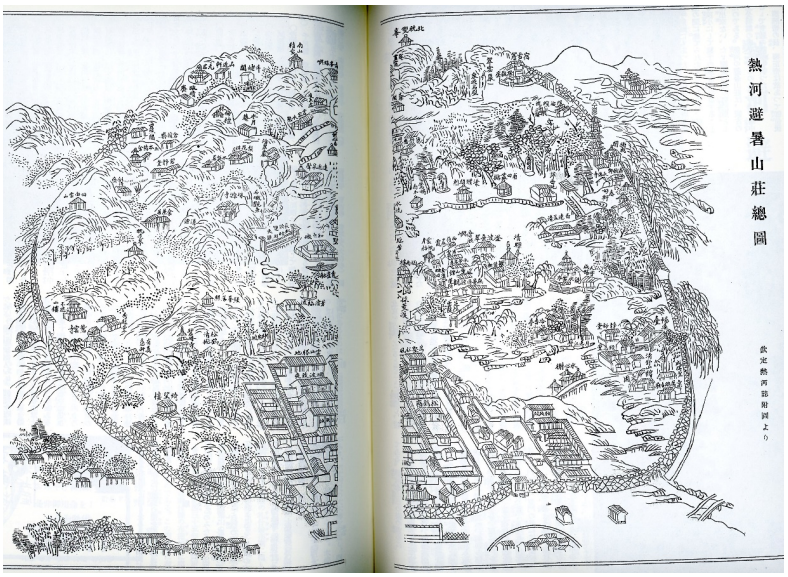


図 10（満洲旅行特輯号表紙）

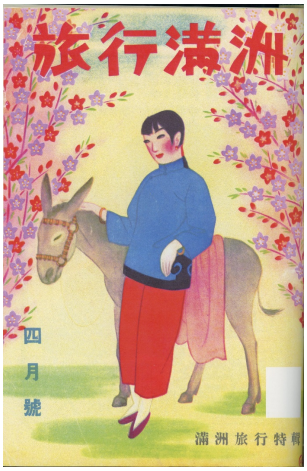

図 11（銃の広告）

図 12（「あじあ号」のグラビア写真）

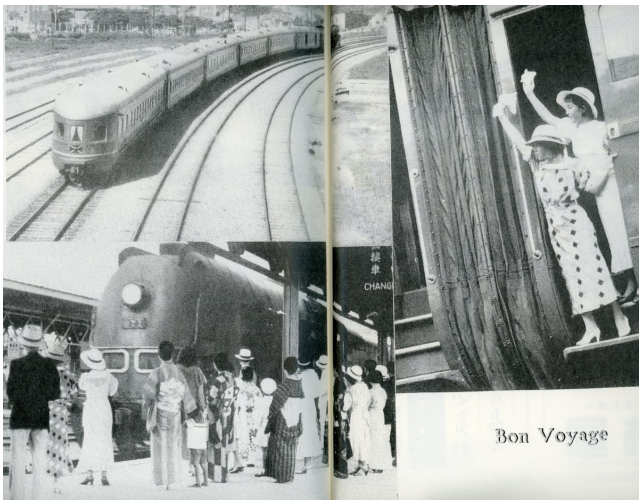


図 13（当時の聖ソフィア大聖堂）

図 14（ロシア人街の一角 旧ハルビン市公署）

図 15（旧満鉄病院）

図 16（当時の大連市街マップ）

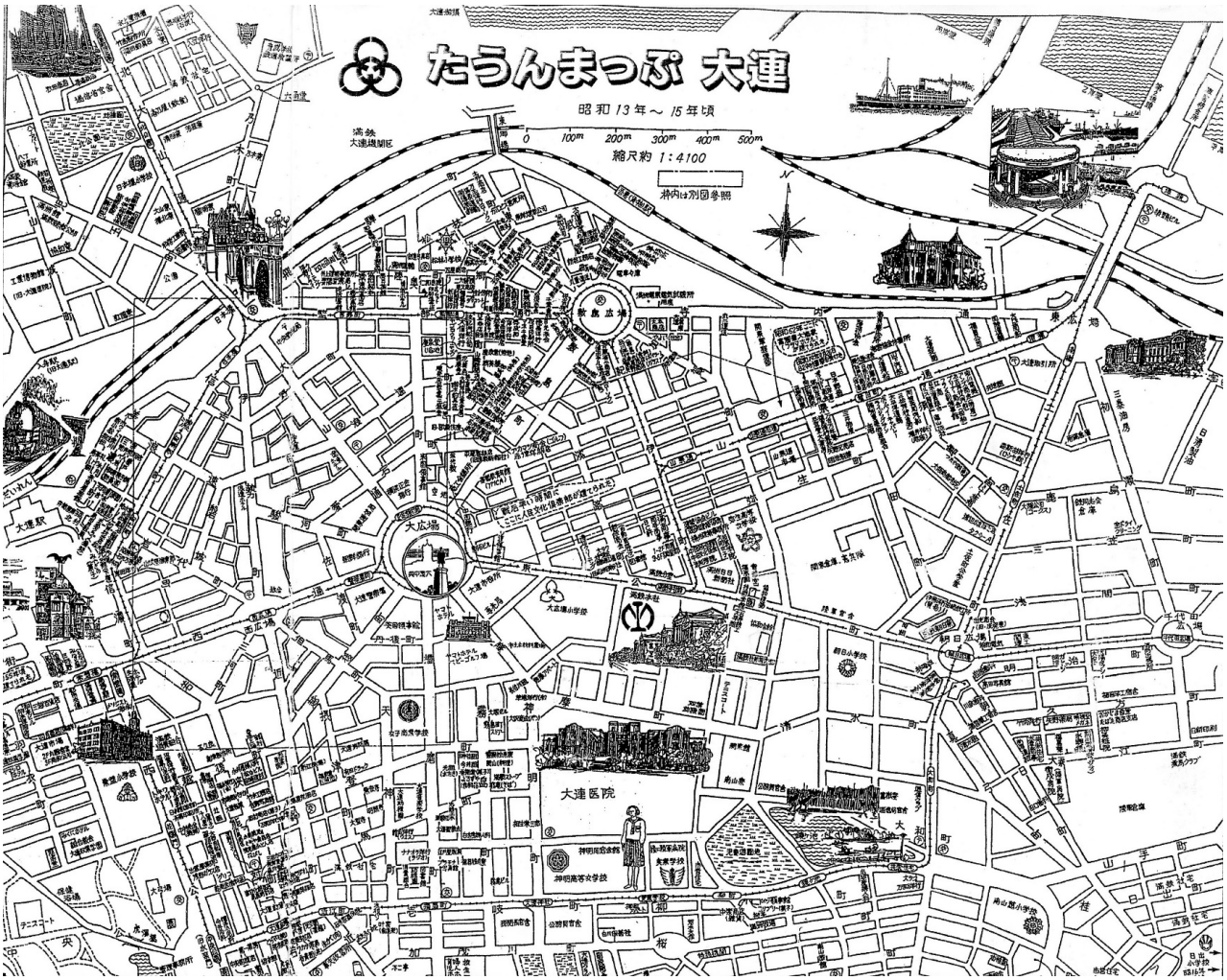


図 17（当時の大広場）

図 18（現在の大広場）

図 19（当時の日本橋）

図 20（当時の大連駅）

図 21（当時の満鉄本社）

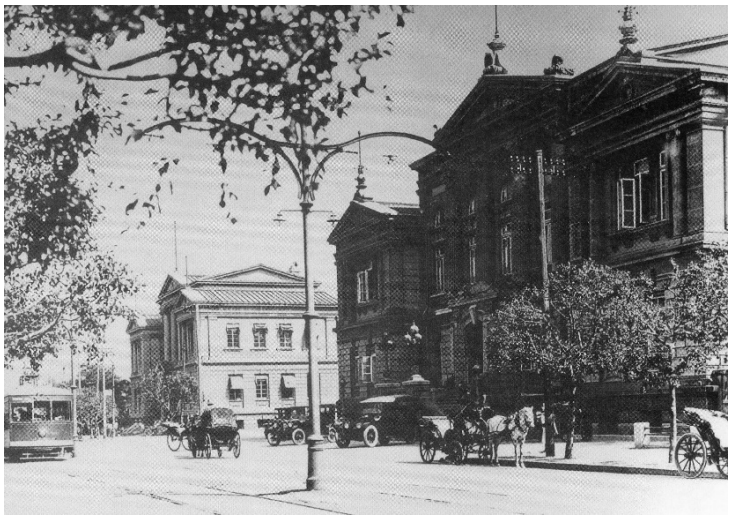

図 22（現在の旧満鉄本社）

図 23（当時の大連港ターミナル）
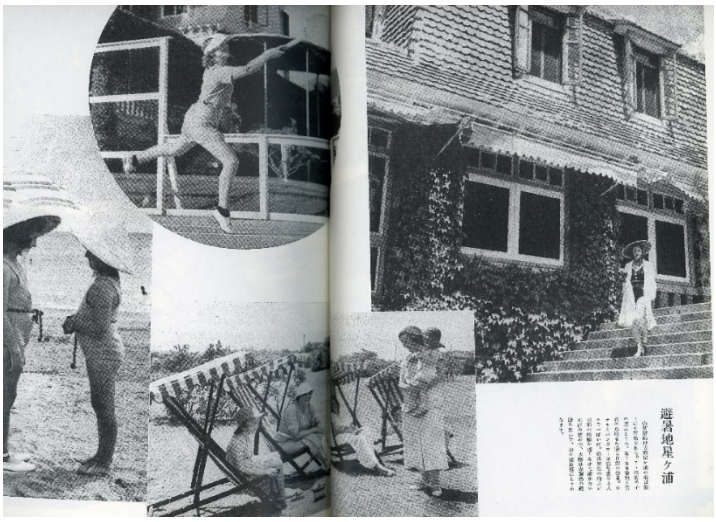
図 24（星ヶ浦のグラビア写真）